

叱られない社長が会社をダメにする2

コアラのチーマー

最小限の資金で最大効率を叶えないとダメ

この項を書いている現在、テレビの大河ドラマでは「軍師官兵衛」が毎週放送され、人気を博しています。好きな方も多いでしょう。

ところでこのドラマでも扱われた、戦国時代の名シーンに「高松城への水攻め」があります。周囲を湿地帯だか沼地だかで囲まれた自然の要害、水はけが悪い地質・地形を利用した難攻不落の城を、囲むように堤防を作って水没させるという有名な作戦です。歴史の授業でも教えていますから、ドラマを見ていなくともご存じという方は多いでしょう。

ところで皆さん、この作戦を聞いて「官兵衛、または秀吉は頭が良いなあ」と感心してはいないだろうか。

誰でもそうでしょうが、私が子供の頃はよく水遊びをしたものです。小学校では大雨の日になると、生徒はこぞって校庭を流れる雨水を土のダムを作ってせき止め、ずぶ濡れではしゃいだものです。

つまり近くに川があったり、山や沼地に囲まれた城を攻めようとすれば、誰でも水攻めは思いつきます。

私がその場にいたら「あそこを堰き止めて、あっちの川から水を引いたら高松城を水没させられるよなあ」という発想に至るのは難くないと断言します。

百歩譲って私のような斗量帚掃では思い付かないとしても、当時の人にとっては安易な発想です。なんたって何も教わらない子供が遊びでやるくらいですから、敵城を落とさねば自分が死んじゃう戦国時代なら、誰でも必死で地の利を調べるなど尽力し、水攻めに辿り着く。

それは高松城を作った毛利側とて同じこと。簡単に水没して負ける場所に城を造るはずがありません。ではなぜ敵味方とも水攻めに気付いていながら、それまで実行不可能だったのでしょうか？

それはズバリお金の問題。高松城の水攻めに要した費用は記録があり、現代のお金に換算してなんとウン兆円。国家予算に比しても決して少額ではありませんから、戦国時代の金銭感覚に詳しくない方でもベラボーだと解ります。

「この戦いに勝てば全国制覇だ」という一戦ならまだしも、有する領地は未だ日本の一部、それも周囲を敵に囲まれた織田信長の、それも一武将に過ぎない秀吉が、それも地方のたかだか一城を攻めるためだけに費やした額面が「兆円」？

しかも敵側毛利の加勢が来るからと知った秀吉は、結局信長に援軍を請う。その結果が本能寺の

変に至ったのはご存知のとおり。

巨額を投じて結果を出せず、上司に泣きつき挙句の果てに上司を死なせた秀吉や官兵衛は、現代の戦国時代を戦うビジネスマンのあなたから見て、果たして優秀でしょうか。

腐るほどの予算を使って良いなら、誰もノルマで苦労しませんよね。

では信長や官兵衛はなぜそれほど巨額の軍資金を調達しえたのか？

ご存知の方は少ないようですが、戦国時代の軍資金調達的手段として重要だったのが国際貿易。あのフランシスコ・ザビエルを信長が手厚く保護したのはポルトガルとの交易を確保するためです。

日本からの主な輸出品は銀や鉄砲や奴隷でした。戦国時代の日本は数十万人もの奴隷を海外へ輸出する奴隷大国。ちなみに主な輸入品のひとつが鉄砲の火薬。日本は鉄砲本体はたくさん作れども、火薬の材料がなかなか採れない。

つまり信長が奴隷を輸出していなければ、あの長篠の戦いでの圧勝も無かった。こんな史実、なぜか学校の歴史では教えてくれない。

信長が、秀吉が、官兵衛が、奴隷売買をどこまで率先して行ったかは解りませんが、少なくとも認知していたのは確か。大河ドラマが果たして正しく伝えるのか、見どころです。

社長たるもの少ない資金での最大効率を心掛けましょう。